

幼稚園教育 九十年史



多田鉄雄

本書は昭和四十一年がわが国幼稚園教育九十年に当たるので、文部省がその記念事業のひとつとして同年度中に刊行する予定のものであった。しかし資料の収集・執筆監修に予期以上の日時がかかり、ようやく昨年九月になって刊行された。

文部省はこれまで学制何十年史とか実業教育何十年史とか、そのほか種々の年史を編集刊行して来たが、幼稚園の年史はこれが初めての試みであった。

本書はその編集後記にあるように、編集方針・方法など、その根幹を決める、文部省首脳部を中心とする十五名の編集者と、実際に執筆する十八名の執筆者と、更に資料の収集に当たったり、多数の執筆者によって書かれた原稿の精粗を調整したりする文部省初中局初等教育課長および課員十六名より成る編集事務担当官の三者によって完成されたものである。実は筆者も編集の企画にも参画したほか、執筆者の一人として相当部分を担

当執筆したものである。その点でこの書評はあるいは第三者的立場が確立していない心配もある一方、内部的な事情に通じている利もあるといえるであろう。

本書は制度、普及、教育課程と指導法、教職員、施設設備の五つの章と、四五〇頁を超える資料編から成り立っている。本文の各章はそれぞれその章のテーマの専門家が分担執筆し、資料編は九十年史年表をも含めてほとんどが編集事務担当官が編集したものである。

本書の特色はこのように執筆者がそれぞれその専門分野を分担し、さらに統一的に調整されている点で、個人の著作には見られぬ強味を持っていることが一つ、第二は文部省が各都道府県の教育委員会を通じて一方ならぬ苦心で可能な限りの資料を収集し、各執筆者の資料とあわせて、これを本文にも取り入れていることである。このような収集は個人では到底なしとげ得ない事柄である。

もともと歴史的に見て、幼稚園教育の重要性は長い間一般には認められず、特に古い資料は散逸されてしまったものが多く、極く一部のの人々によってその若干が保存されて来たにすぎなかった。わが国で初めて昭和九年に倉橋惣三、新庄よしこの両氏によって著わされた「日本幼稚園史」も、「資料の収集が難かしく」わが国の最初の幼稚園であるお茶の水女子大学付属幼稚園を中心としているようになって、「幼稚園史と称して実は幼稚園発祥史の観がある」（同書、序）と述べているのは右のことを裏書きしているものである。その上、大戦による戦災で埋もれていた資料がさらに消滅したと考えられる。たとえば明治十一年の関信三の「幼稚園創立法」は前記「日本幼稚園史」においては「この書は何処にも現在せず、どういう内容を有つものかは今明らかでない」としているが、本書の資料編ではこれを採録しており、その出典

は「文部省教育雑誌、明治十一年十二月号」としているが、筆者は昭和十三年ごろわが国で二番目に創設された鹿児島女子師範付属幼稚園で古い文献の中から筆で書かれた「幼稚園創立法」を発見し、それを筆写して保存している。これはこの論稿が前記の雑誌にのっただけのものか、独立の書として刊行されたものであったかを検証するための重要な資料であるにもかかわらず、戦災で同幼稚園は焼失してしまったのである。

このように本書は各専門家の共同労作であるほか、恐らく残存する資料はほとんどすべてを収集したともいえ、他の追隨をゆるさぬ豊富な資料のもとで作成された点で極めてユニークな書といえる。さきごろから保育学会によって逐次著わされている日本幼児保育史は確かに貴重な労作であるけれども、資料の点では本書に及ばない。それ故幼稚園の制度、内容などを歴史的に調べようとする人々に

は欠くことの出来ぬ参考の書といえる。

ただ本書が官庁の刊行物である点に、かかる種類のものに共通な弱点があることは否み難い。すなわち国の政策・行政にとつて鋭い批判になる点はこれを取り上げないように編集されていることである。さらに予算とか他の刊行物とのバランスとかの制約によって、執筆者の原稿のかなりの部分が要約され縮められ除去されている。それにしても七八二頁に及ぶ大部のものが刊行されたことは文部省関係官の大きな努力の結果であると思ふべきであろう。

一方、これまでの文部省のかかる年史は極めて味気ない、いわば記録の羅列の感がするものばかりであったが、本書は少なくともその点ではるかに豊かな内容を持つている。望を得て蜀を望めば、原稿、資料など予算などの関係で除去された部分が、何かの機会に他の方法で刊行されることである。